

宗教と資本主義

はじめに

今日人々は、資本主義という言葉を用いて、無造作に日常語として使用している。元來資本主義という言葉は、近世以後の西歐社會の經濟體制を、特徴づけようとする學術語であるがその概念の内容は、諸學者によつて種々様々に理解されている。或學者は、資本主義の相異なる定義を一〇〇以上もあげているが、それらを要約すると、大體つぎのようなものに分類される。例えば拜金主義とかマルクスの意味における資本家的生産様式、個人主義的自由主義的經濟形態、貨幣經濟、あるいは大企業が支配する經濟的生產様式など様々の定義が與えられており、そしてこれらの概念は、いづれも近代資本主義のもつ諸特徴のいづれか一つを指摘しているが、それの

稲 岡 順 雄

みでは充分な定義とはいえない。しかしこれらの諸特徴を綜合して考えてみると、資本主義とは、二つの異質な人口集團、即ち生産手段の所有者乃至指導者たる經濟主體と經濟客體たる生産労働者が市場を通じて、結合し、かつ協働するところの營利主義と、經濟的、合理主義とが支配する、流通經濟組織であるとしたゾンバルト(E. Sombart)の定義が極めて妥當であると考えられるが、しかしゾンバルトが強調した營利主義(營利欲)は必ずしも近代資本主義の固有の特質でなくもしこれをその固有な特徴であると考えるならば近代資本主義の歴史の起源は古くは中世、または古代にまで溯ることができる。なんとすれば人間の營利欲は、それほど人類に固有のものであるからである。こゝにまた、比較的、完全なゾンバルトの定義にも限界が見出される。それほどに

資本主義の概念は、複雑であるといはなければならない。

兎に角資本主義とは、結局資本家的生産様式をその本質とするものである。即ち價値の増殖を目的とする營利主義的生産であるということでなく、その利潤が工場制度によつてつくり出される、剩餘價値を基礎として、生み出されることである。そして工場制度資本家が所有するところの機械を設備した工場において、賃金によつて雇傭された労働者によつて商品の生産が行われ、労働力に等しい賃金と現實に提供された労働との較差としての剩餘價値が生み出される制度である。このような剩餘價値が資本家の利潤の源泉であり、それを獲得することが資本家的商品生産の行われる、根本原因である。

このように考えると、資本主義は産業革命による、近代工業の出現と産業資本の形成によつてはじめて確定されたものであるといえる。従つて古代資本主義や商業資本主義という言葉は、近代資本主義の本質から考えてそれらの範疇を逸脱しているものといふことができる。

以上述べたことを、歴史的に考えてみると、結局近代資本主義は一六世紀以後西歐社會において除々に形成されるはじめ、一八世紀後半乃至一九世紀前半の産業革命によつて、資本の原始的蓄積の過程が終りその基礎が確立

されていくが、その後さらに獨占資本主義、金融資本主義の段階を経て、最後に國家獨占資本主義の形態をとるにいたつてゐる。

このような特質をもつ近代資本主義と宗教との關係は從來より多くの學者によつて、しばしば論ぜられて來たが、ここでは、この問題について多くの注目をひいたマックス・ウェーバー (Max Weber) の理論を管見しついでこれを批判したトーニー (Richard Henry Tawney) の説を中心として、考察していくであらう。

第一章 プロテスタンティズム の職業倫理

マックス・ウェーバーによると職業 (Bewf, calling) という言葉は、宗教改革以後、世俗的な職業が神の召しによつて、與えられた使命であるとの宗教的な意味が含まれてゐると理解された。これは新しい倫理觀であり、日常の世俗的な労働を尊重し、世俗的徳業の内部における義務を遂行することを道徳的な、實踐的な實踐生活の最高の内容として重視する倫理觀である。そしてその當然の結果として、日常の世俗的労働に宗教的な意味を認める思想が生み出され、その意味で職業が神の召しによつて、與えられる使命であるとの觀念が作り出されたの

である。このような職業観念はプロテスタンティズムの全教派に共通な教理であり、このことは結局世俗的な僧侶的禁欲道徳に對する世俗内的道徳を輕視せずむしろ社會生活のなかにおいて職業として與えられた世俗内的義務の履行を神に喜ばれる、唯一の手段であると考えたことである。

とくに、ルッター (Martin Luther) は上述のような神に喜ばれる、唯一の道は世俗内的義務の履行であり、神に許された職業である限り全ての職業は神の前に同一の價值をもつものであると信じていた。しかしルッターの立場はプロテスタント諸教派のなかでも最も傳統主義的であり人が所與の歴史的客觀的な環境におかれているとき、それは神の意志に基いているのであるからその授けられた職業と身分とに止まるべきであり、その社會的地位と範圍を越えてはならない。それは神えの無條件的服従と所與の環境えの無條件的適應とを同一視するものであり、その結果職業労働に對しては、積極性をもつことはできなかつた。この點においてルッターの立場とその後のカルヴァン (Calvin) を中心としたいわゆるカルヴィニズムの諸教派との立場は異なる精神に立脚し、ルッターの強烈な個人的宗教體驗は、宗教改革一般に對して、強い精神的影響を與えてはいるが、彼の開始

した宗教改革の事業は、カルヴァンによつて始めて、外的に強固になつたといわなければならない。

さて宗教改革の第二の指導者であるカルヴァンとそれが生み出した諸教派は、職業觀については、ルッターと比較して、遙かに積極的な態度をとつてゐる。兎に角、カルヴィニズムなるもの、目的の中軸は、靈魂の救済である。このような、純粹な、宗教的動機を根柢として、その固有な倫理的目標や教説が歸結されたのである。そしてこれらの立場に立つカルヴィニズム及び、そのプロテスタント諸教派は一括して、禁欲的、プロテスタンティズムと呼ばれているが、これらに共通した最も特徴的な教理は、恩恵の撰びの教説 (Gnadenwahl) 即ち豫定調和説 (Prädestinationslehre) である。この教説が、カルヴァン諸教派の本質的教理であるか否かは別として、少くともこの教説が、カルヴァン諸教派のなかで、決定的に重要な役割を果したことは事實である。この教理はいうまでもなく、宗教生活における救済は、絶対に客觀的な力の働きに基くものであり、何ら人間自身の價值にあるものではないとの意識の上に立つてゐる。そしてこの豫定説が、ルッター及び、ルッター派においては徹底されず、むしろ弱化されていつたのに對して、カルヴァンにおいては、逆にその生涯の終りの時期に近づくに従

つて、この恩恵の撰びの教説は、いよいよ重要な意義をもつて、徹底されていったのである。そして遂には、恐るべき教理となつたのである。

そしてカルヴァンのこの教理は、また、ルッターの場合のように、宗教的體驗にもとづくのではなく、倫理的なものであつた。即ち、人間は神のためにあるのであり、人間のために神があるのではない。神のみが自由であり、いかなる規範にも服せず、また、人間の個人的運命はすべて、神の意志にのみ屬し、人間の知るべからざる神秘である。ただ人が知りうることは、人類の一部のみが救われ、他の部分は永遠の滅亡に定められている。神の決断は、絶對的自由であり、永遠のはじめから動かず人間の功德や過失罪過などは、この運命に全くあずからない。このような教理は、たしかに恐るべき教理であり、極めて非人間的なものであつた。

このような教説が個人の精神に與えた影響は、まず直接には、各個人の精神的孤立化即ち内面化であつた。宗教改革時代の最も重要な、問題であつた永遠の救済についても、何人も彼に助力することは、不可能であり、従つて、そこには必然的孤立化、即ち内面的な神への志向が生れざるを得ない。しかも個人も他の個人から、また環境から孤立させ引離す、というこのような、徹底した

孤立化が奇異なことには、カルヴィニズムにおいては、現實に對して、組織的に戦いかつ何よりも社會的組織を築きあげる、卓越した能力と化したのである。そしてこのことは、更に人々の周圍の社會的秩序の合理的構成の働きとなり、また、職業義務を履行する推進力となつたのである。即ち勞働は非人格的社會的効用に奉仕するものと想念されたのである。

そして最後に、宗教改革時代の人々にとつての最重要の問題であつた、救済の問題についても當時は恩恵の撰びの教説、即ち豫定説に従つて、人々は、ただ神の決断に信賴しなければならぬ、というほかには、何等の解答も與えられなかつた。人々は、自身が救われているか否かを問うことは、神々の秘密に立ち入ろうとすることであつた故に、嚴につしまなければならなかつた。しかし、一般の信徒にとつては、救済の確實さは、何よりも最も重要な問題であつたし、また豫定説の信奉されたところでは、人が撰ばれたものゝ一人であるか、否かは深刻な問題となつたのである。そしてこの場合、教會が奨めたのは、人々が救われたものとしての自己の確信をもつことゝ不斷の職業勞働に従うことであつた。兎に角カルヴィニズムにおいては、人々は自身の救済の確信を自ら造り出すことであつた。即ち自ら組織的に自己審査

を行うことである。そして組織的な自己審審とは、組織にまで高められた正しい生活を送ることであり、その生活を合理化することであり、その意味で、非合理的な、官能の衝動から人間を分離させること、いいかえれば、禁欲的傾向をもつことであつた。このようにして、豫定説を信奉する禁欲的プロテスタンティズムが倫理生活全體の組織的合理的構成に結びついたのである。

このように、宗教的意味を、賦與された職業観、即ち職業聖召観は豫定説の支持によつて、職業生活の徹底的な合理化を遂行することになった。この場合、職業生活とは一つには、労働や生活の過程であるし、一つには、生産の過程であつた。そしてプロテスタンティズムの職業倫理は、除々に産業革命によつて、促進されつつあつた資本主義化の體制的精神的基礎となつたのである。

第二章 資本主義の精神

資本主義の精神という言葉はマックス・ウェーバーの有名な「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という書物によつて、學界に提起されて著名な問題として、取上げられたものである。彼によると禁欲的プロテスタンティズムが、前述のように職業聖召観に基いて労働主體の資質を著しく高めたことはただちに近代社

會の端緒において生産力の劃期的向上のために大きな原動力となつた。このように生産力を高める倫理意識は、プロテスタンティズムの倫理であり、そしてそれは宗教的性格のつよい禁欲しかも世俗的禁欲という性格をさえ伴いながら、近代社會のなかに、持込まれたのである。

元來近代社會の經濟構造の發展はまづ單純商品生産、マニファクチュアールの商品生産、そして本來の資本主義的商品生産へ、と進行する。プロテスタンティズムの職業論理が働きかけるのは、最初の單純商品生産の段階であり労働の生産力の向上を刺激して、つぎのマニファクチュアールの商品生産の段階に移行するのを促進的に媒介するようになる。このように、近代社會の構造的發展を、促進する精神的條件として、プロテスタンティズム以來の職業倫理が、主要な働きを果したのである。

マックス・ウェーバーによつて、提起された、このいわゆる資本主義の精神の問題は、いまだに問題性を失つてはいない。いな今日でも重要な學理的意義をもっているが、われわれはさらに、マックス・ウェーバーの論旨によつて立つ根本的立場を追求するであらう。彼は、まづ近代資本主義を人類の歴史とともに古い いわゆる賤民資本主義 (Paria-Kapitalismus) から區別している。そして後者は、共同體 (Gemeinde) の基盤に立ち、そ

れはせいぜい商業金融などの流過程にとどまるのに對して、前者、即ち近代資本主義は、この共同體を崩壊させ、自らよつて立つ、生産的基盤を新たに造り出す。そして資本主義の精神は、とりもなおさず、この歴史的發展に、即應した意識形態である。従つて、資本主義の精神は、歴史とともに、古い營利欲でなく、近代資本主義の成立に際して、構成的に作用した經濟倫理であつた。このような觀點から考えて、資本主義の精神は、必然的につぎのような、特質乃至、内容をもつものといえる。

まず第一に、それは勞働生産の倫理であるということである。それは勞働を、自己目的とするほど外部的な刺激や、強制をまたずに勞働を遂行させ、内面的、自發性によつて、促進されている、このように勞働をひたすら追求することから、この目的を達成するためには、一切の障害と、更にすゝんで非合理的要素を、取り除かなければならない。そこに、おのづから目的合理性、という傾向が生み出されてくる。このように、勞働に生産の内面的自發性と、目的合理性とがそれぞれ、生産力向上のための原動力として、その基礎となつてゐる。このような側面に關する限り、資本主義の精神にプロテスタンティズムの倫理が繼承されている。

第二には、一方ひるがえつて、考えてみると、この勞

働生産の過程の進行、即ち再生産過程は、たえず市場という商品流通によつて媒介されなければならず、また、商品の經濟的發展によつて勞働力の雇傭關係さえ、商品流通の法則によつて規制されるにいたると、生産過程さえ一つの特殊市民社會的な條件によつて、媒介されざるを得なくなる。即ち再生産過程の進行は、このような商品經濟の發展とともに成立する利潤の獲得と、その不斷の追求という「營利」によつて、不可避免的に媒介されざるを得ない。營利はもともと、プロテスタンティズムの倫理の立場である、禁欲的態度に對して、反倫理的である。ところがこの勞働生産の倫理が、本來反倫理的な「營利」と不可避免的に結びついて、いわゆる資本主義の精神という特殊市民社會的態度を形成するのである。即ちその新しい「精神」は、「營利」を反倫理的とはみなさず貨幣的利益の獲得は、倫理的行為によつて、生み出されるものであり、倫理によつて、裏づけられることゝなつたのである。

第三には、このような倫理的基礎の裏づけをもつ、資本主義の精神は、その成立の歴史的段階からしてまず最初には、單純商品生産に對應する、小商品生産者の精神であつた。この場合は、嚴密な意味での資本主義の精神とはいえないにしても、それの萌芽をもつところの、

本質的に資本主義の精神と共通の歴史的性格をになつてゐる。そればかりでなく、さらに、それはやがて、小商品生産者層、即ち獨立自由農民、手工業者層などの産業的中産者層の自己分解が進行し、そこに市民社會の二つの階級、即ち一方では、資本家の精神に轉化し、他方では、労働者階級の労働倫理にまで上昇する。

このような意味において、資本主義の精神は、特殊近代資本主義的な企業家に不可欠な、經營的資質と近代労働者に必然的な、資質である特殊合理的な勤勞意欲の賦與にまで、宗教的倫理的に作用するのである。

以上述べたマックス・ウェーバーの理論を彼は主として、カルヴァン主義、なかでも、その例證のほとんどすべてをイギリスの清教主義にとり、それが資本主義的企業の發達にとつて、都合のよい倫理的政治的な諸條件をつくる上に、とくに重要な役割を果したことを終始論證し、トレルチ (E. Troeltsch) の支持をうけたが、ブレンターノ (B. Brentano) 其他の學者は、ウェーバーの意見に全面的に反對し、トニー (R. H. Tawney) やゾンバルト (W. Sombart) などは兩者の折衷論を表明しているが、われわれはこゝでは、主として、トニーの意見を、勘案しつゝききに述べた、マックス・ウェーバーの理論を批判檢討するであらう。

第三章 宗教と資本主義に關する諸問題

トニーは、一九二七年に出版した『宗教と資本主義の興隆 (Religion and the Rise of Capitalism, A Historical Study)』という書物のなかで、ウェーバーの前述の研究に偉大な感化をうけたことを告白しながら、彼の主張を忌憚なく、表明し、ウェーバーの考え方を、痛烈に批判している。

まず彼は、ウェーバーの試論が、宗教と社會理論との關係を檢討した研究としてこれまでに數をみないほどの成果をあげていることを認め、彼自身もこの研究から、大いに啓發されたことを感謝し、とくに職業聖召觀という倫理觀念を經濟的問題に、適用して論ずるという新しい試みを極めて高く評價しているが、學問的には、ウェーバーの理論がとくに一面的であり、時には獨斷的であることを容喙なく批判している。その點では、ブレンターノがウェーバーの論文に加えた批判をより多く支持している。

例えば、經濟及び社會組織における變動と切りはなしで、經濟思想及び、社會思想を取り扱うという體制のもとでは、止むを得ないことであるが、ウェーバーは全く

他の領域においては、十分説明しうる發展という觀念をば倫理的な、あるいは精神的な影響力と關連さして説明している嫌いがある。具體的にいえば、一五世紀のヴェネシフィアやフィレンツェあるいは、南ドイツや、フランドル地方には、資本主義の精神は十分展開をとげていたことは、明らかな事實である。そしてその理由は、これらの地域が、その當時最大の商業上金融上の中心地であつた。ところが、それらの地方は、全部すくなくとも形の上からいふならば、カソリックの盛んな土地柄であつた。一六、七世紀におけるオランダ、イギリスの資本主義の發展はマックス・ウェーバーのいうようにこれらの國がプロテスタントの強國であつたという事實にもとづいていたのでなく、むしろ地理上の大發見や、それから生じた結果としての大規模な經濟的動きによつていたと考えるべきである。もちろん、物質的な變化と心理的な變化とは平行して、すゝむものであり、また後者が前者に反作用を及ぼすことも否定出來ないが、資本主義的企業が宗教的な變化によつて、資本主義の精神が生まれてくるまでは、現われなかつたように考えることは多少誇張されすぎているとはいふものの、その宗教的變化が全く經濟的な動きの結果であるということも同様に、眞實ではあるが、また一面的であることは免かれない事

實である。

第二には、ウェーバーは企業の發達と、經濟關係に對する個人主義的な態度をつくりだす上に、好都合であつた精神運動のなかで、宗教と殆んど無關係なものをば、無視しているが、あるいは餘りに軽く取り扱つていふうらみがある。例えば、ルネッサンスの政治思想が、その一つである。プレントナーが指摘しているように、マキアヴェリは宗教的な倫理的な制約を、融解させたという點と、また實業家や經濟學者たちの貨幣價格、利子、外國爲替などに關する思辨もカルヴァンに劣らず、資本主義精神を培う上に有力な存在であつたと考えられる。

第三には、ウェーバーはカルヴァン主義そのものを、單純化しすぎるきらいがあることはいふまでもない。例えば一七世紀のイギリスの清教徒たちに、カルヴァンや、彼の直弟子たちがいだいていたと同様の社會倫理の考え方があつたものと假定しているし、また、彼は一七世紀のイギリスの清教徒がすべて社會的義務と社會思想について、ほぼ同じ見解をいだいていたかのように考へていた。このような二つの考え方は、誤解されるおそれがある。即ち一六世紀のカルヴァン主義者たちは、嚴格な、規律を信じ、それを守つた人々であつたから、それ以後の清教運動については當然であつた個人主義が、彼等の

なかにもすでに存在していた、などと考えることは當を得ないし、それよりも前の立場から、後の立場、その變化がなせ起つたかの原因を追求すべきであるのに、このことはウエーバーによつて、無視されている。そしてつぎには、一口に一七世紀の清教主義といつても、そのなかにはさまざまな要素が、いりまじつており社會政策や社會思想についても、極めて異つた見解をもつていた。貴族と平民、地主と小作人、商人と職人、兵士と將軍など、階級や身分の相違によつて、清教運動それ自體のなかで、いろいろなこととなつた教理についての論争が行われていた。

以上のような觀點からみて、『資本主義の精神』とか『プロテスタンティズムの倫理』といつても、ウエーバーの考へていたよりも事實は、はるかに複雑であつたといふことである。しかしウエーバーが一七世紀のイギリスの商業階級の人々の社會思想や、社會政策についての見解は、農民、職人、地方などのより保守的な人々よりも明白に異つたものであつたということゝまた、その人々の考へ方は、宗教や政治のみならずそれ以上に社會的及び、經濟的行爲や政策に、多大の影響を與えたという點に、注目したことは高く評價しなければならない。

む す び

以上の小論において、われわれの取扱つた問題は、ゆうまでもなく、宗教と最も顯著な社會現象である、經濟現象との相互關係ということ、即ちゆうなれば宗教社會學の一側面としての試みである。敗戦後の我が國の變貌は極めて著しい。物質的なものを主とした社會的變革と、それに伴う精神的、心靈的混亂は、まず傳統的權威の崩壊としてあらわれ、ついで主體性の喪失、更にその結果としての人間性の分裂、とゆう過程を通じて結局文化の混亂となつて今日にいたつてゐる。

とくに、宗教現象においてこの傾向は著しい。そして一方では、人々は、このような危機を克服し、のり越えようとして、生命の據りどころとする何ものかを求めている。そのことが一方では、既成宗教の復興が叫ばれると同時に、またそれ以上に急激なめざましい經濟的繁榮に取殘された幾多の民衆は、新しい宗教を求めて殺到している。このように我が國は、今日あらゆる方面において、幾多の問題を胎んでいるが、ことに宗教に關する限りこの傾向はとくに著しい。われわれ、宗教者は、今日の日本の宗教的混亂を十分よく、見きわめて、新しい正しい宗教の樹立に邁進する義務がある。そしていかなる

宗教が將來の日本文化進展の精神的推進力になるか、いかなる宗教が將來の社會から脱落し、消滅する運命をたどるかを十分よく探究することが、肝要である。そのためには、現實の宗教の批判から出發しなければならぬ。その一つの試みとして、宗教と社會の相互連關、即ち宗教の社會學的研究が要望せられる所以がある。この意味において、近年しだいに注目を浴びてきたものは、マックス・ウェーバーの宗教社會學である。これは彼の龐大な社會學體系のなかでもとくに中心的地位を占めるものであるが、彼はこのなかにおいて、一見無縁にみえる宗教現象と經濟現象との相關關係を、究明して偉大な業績を残したのである。しかし限られた紙面において、その全貌をうかがうことは、到底不可能であり、このような小論のよくするところではないが、このような、問題提起が前に述べた現代宗教のもつ諸問題の解決の端緒の一つとなれば、筆者の望外の喜びである。

あとがき

マックス・ウェーバー (Max Weber, 1864-1920) はいうまでもなく、ドイツの生んだ、有名な社會學者であり、法制史、經濟史學者である。彼の社會學の根本的認識目標は、社會生活のあらゆる局面を支配する合理的生

活原理の成立理由を解明し、市民的資本主義經濟や合理的官僚制を参照しつつ、近代社會における現代の人間の批判と分析を行なうことにあつた。このような合理化過程へのあしなき追求が、宗教論理と經濟行爲との關係を取り扱った、一種の宗教社會的比較研究として、結實したのであつた。しかし彼の偉大な業績と、その體系については從來から種々批判され、本論にあげたブレンターノ (L. Brentano 1844-1931) 其他の學者の攻撃をうけたが、こゝに取上げたトニー (Richard Henry Tawney, 1880-) もその有力な一人である。彼もウェーバーと同様、經濟史家の立場から多くの著書をあらわしているが、主として、宗教と資本主義の興隆 (Religion and the Rise of Capitalism: a historical study 1926, 出口勇藏、越智武臣共譯) 宗教と資本主義の興隆 (上下二巻) において、ウェーバーを批判しつつ、新生面をひらいて近代經濟倫理の研究を行っていることを附記してこの小論の筆をおく。